いい加減な夜食 4

秋川滝美 Takimi Akikawa

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

目次

いい加減な夜食４　5
【書き下ろし番外編】
いい加減な刺激　341

いい加減な夜食４

第一章　新しい家族

あちこちのデパートやスーパーがクリスマス商戦真っ盛りの十二月二十二日。
クリスマス当日だろうと言われていた予定日より三日早く、原島財閥総裁原島俊紀の妻、佳乃は第二子の出産を終えた。もうあと数分で日付が変わるという深夜のことだった。
今回は第一子誠也のときのように『姫さん、水漏れで入院だぜ～』などという、気の抜けたメールが送られることもなく、至って順調な経過を辿った。出生体重が標準よりも少ないことは気になったけれど、それ以外に所見はなく、文字どおりの安産だった。
出産から数日経ったある日、佳乃が大部屋で周りの産婦さんたちと昼食後の団欒を楽しんでいたところにやってきたのは、幼なじみ兼長年の親友、田宮朋香だった。
ガラス越しに新生児室を覗いてきたばかりだという朋香は、佳乃のもとに来るなり呆れたように言う。
「爆睡してた～！　いやー、でも、本当に女の子が生まれるとは思わなかったわ」

そんな朋香の言葉に、佳乃はちょっと不満げな表情になる。
「どういう意味よ、それ」
「いや、女の子を欲しがってたのは知ってたけど、そういうのってあんまりうまくいかないものじゃない？　女の子が欲しいのに男の子ばっかり三人とか、その逆とか」
そういえば以前、俊紀の母和子から、女の子が欲しくて産み続けた結果、五人も男の子を授かってしまったという女性の話を聞いた。確かに世の中は往々にしてそういうことが起きるものだ。
「うーん……まあ、欲しかった女の子が授かってよかったのは確かだけど、実際、九ヶ月もお腹に入れてると、最後はもう男でも女でも……ってなっちゃうのよね。無事に生まれてくれたらそれだけでいいってさ」
その感想は、長男誠也を産んだときとまったく同じで、二人目でも三人目でも変わりそうになかった。
「あー、それはそうかもね」
「ついでに、あの陣痛の痛みが延々と続いたら、とにかく『早く生まれてーーー！』としか思えなくなるよ」
「学生時代から柔道三昧で、痛い目には慣れっこのあんたですらそうなのか……」

「別物、っていうより段違いだね！」
「なにそれ、自慢？」
「あの痛みに耐えきったんだから自慢ぐらいしてもいい！　って感じ」
「うう……」
おびえきったような朋香の様子に、佳乃は笑いが抑えられなかった。
朋香に伝えた言葉は佳乃の本心だったが、ただ、あの痛みの末に生まれてくるからこそ、より可愛いと感じるのかもしれないとも思う。帝王切開などの術後の痛みまで含めて、産みの苦しみというのは、あれでけっこう意味のあるものではないかと、佳乃は感じていた。
そして、もしも朋香が子どもを産むことがあったら、その子に、誠也や生まれたばかりの娘と遊んでもらいたい。俊紀も自分もひとりっ子で、我が子に従兄弟（いとこ）という存在を与えてやれないだけに、ついついそんなことを思ってしまう佳乃だった。

「夫婦ふたりが一男一女に恵まれて、原島家の人口減問題もあんたの代でストップ。なんならいっそ、もう二、三人産んで先代、先々代の分まで取り返したら？」
多少子だくさんでも、原島家なら問題ないでしょう？　と朋香は笑う。

確かに原島邸は広いし、俊紀の脛（すね）は自分で宣言するほど頑丈である。産めるだけ産んで四方八方からかじり付いても平然としていて、路頭になんて迷いそうにもない。それでも佳乃は、子どもはふたりで十分かも、と考えていた。
そう答えた佳乃に、朋香は首を傾げる。
「あら、どうして？　あんた、子ども好きでしょ？」
「うん。それはそうなんだけどね……」
朋香の言うとおり、昔から佳乃は子ども好きだったし、面倒を見るのも得意だと思っていた。
だが、よその子を一時的に面倒見るのと、我が子を育てるのは全然違う。特に、誠也という極めて手のかかる子どもを授かったことで、生半可な心構えではやれないと痛感させられた。
決して器用な人間ではない自分が、俊紀の私設秘書という仕事を続けながら育てられるのは、せいぜいふたりまで。俊紀には、女の子が生まれるまで何人でも産んでいいですか？　なんて訊（き）いてしまったけれど、二人目で女の子が生まれてくれて本当によかったと胸をなで下ろしていた。
「私は心配性だし、やっぱりふたりで手一杯。もちろん、原島邸の人たちは何でも手伝っ

てくれるけど、気持ちがついていかないんだよ」
「なるほど、あんたらしいわ。まあ、この先気が変わるかもしれないし、そうじゃなくても誠也君と、このお嬢ちゃんを精一杯可愛がってあげればいいよ」
「そうだよね……」
「あ、でも、前は原島氏と誠也君であんたの取り合いだったけど、今度はお嬢ちゃんとあんたで、原島氏の取り合いになるのかな？　うわーちょっと楽しみ」
「やめてよ、朋香！　実はそれ、かなーり心配してるんだから！」
　生まれたばかりの娘は、小さくて儚げでいかにも守ってあげたくなる。しかも大声で泣くこともなく、眠ってばかりいる。誠也も生まれたばかりのころは同じような感じだったが、それでも、この娘のように授乳時間になっても眠り続け、無理やり起こして飲ませるということはなかった。
　出生体重だって誠也よりも五百グラムも少ないのだ。だからこそ、もっとしっかり飲んでほしいのに、無理やり起こして飲ませても、ほんの数分、申し訳程度に飲んだあとは、またすぐに眠りの国に戻ってしまう。寝る子は育つと言うけれど、飲みもせずにただ寝ているだけで育つとは思えなかった。
　誠也に比べて成長も遅く、眠ってばかりいる娘を、俊紀がどれぐらい心配するかは想像に難くない。さらに、心配は愛の表れでもある。たっぷりこの娘に注いでしまったら、自分の分は残るのだろうか……とため息が出そうになる。まったくの他人、しかも、もう何年も一緒にいる佳乃よりも、生まれたばかりの娘のほうが可愛く思えたとしても不思議はなかった。
「ばっかじゃないの!?」
　そんな泣き言を漏らす佳乃を、朋香は一刀両断した。
「愛妻家と名高き原島氏が、娘とあんたを天秤にかけるわけないじゃない。かけたとしても、あんたの圧勝は見えてるわよ！」
「だって、朋香、さっきは……」
「あんなの冗談よ。あんたがそこまで心配そうな顔になるってわかってたら、絶対言わなかった！　あの人があんたにかける想いは無限大よ。ええもう、こっちが恥ずかしくなるぐらいあんた一筋！　息子だろうが娘だろうが敵じゃないわ。だから、安心していいよ」
「そんなことないよ。朋香は彼のどこを見て……」
「原島さん、授乳の時間ですよ」
　ちょうどそのタイミングで、入ってきた看護師に声をかけられ、佳乃は新生児室に向

かわざるを得なくなる。朋香は、じゃあ私はこれで……と帰っていったので、彼女が大丈夫だと判断する理由は聞けないままだった。

†

十二月二十七日、五日間の入院を終えて原島邸に戻るという朝、佳乃を迎えに来たのはこともあろうに原島財閥総裁その人だった。

しかも彼が乗ってきたのは、原島邸が二台も所有している運転手付きの車ではなく、佳乃が『走る札束』と呼んでいる黒のアウディだという。

「あの……俊紀さん……お仕事は？」

「夫にとって、産後間もない妻を迎えに来る以上に大事な仕事があるのか？」

「あるでしょーーーー！　調印寸前の契約とか、企画進行中の新製品とかーーー！」

実際佳乃は、今彼がどんな仕事をしているかは知らない。けれど、明日は仕事納めだ。今日中に片付けておかねばならない仕事は山のようにあるに決まっている。そんな日にこの男はいったい何をしているのか……と佳乃は頭痛がしそうになる。

「そんなものは誰かにやらせておけばいい」

「私の迎えこそ、誰かにやらせておけばいいんです！　宮野さんでもいいし、大澤さんだっているじゃないですか！」

使用人頭や緊急対策班班長の名前を出し、なんなら運転手の友野さんだけでも大丈夫なぐらいだ、と息巻く佳乃に、俊紀はたった一言で答えた。

「いやだ」

大財閥の総裁がこんなことでいいのだろうか。みんな、この人の指示を待っているに違いないのに……と、佳乃はほとほと困り果ててしまう。だが俊紀は、鼻歌でも歌いそうな上機嫌のまま、佳乃の荷物を運んでいく。

もう彼はここに来ているし、今更どうしようもない。そう思った佳乃はやむなく娘を抱いて彼に続いた。

「どうだ、これ？　我が社が開発した、新生児から使えるチャイルドシートだぞ。事故なんて絶対に起こしたくはないが、万が一ということもある。だが、このシートに収まっている限り、多少の衝撃は余裕でかわせる」

俊紀が自慢げに話す間も、娘はくうくうと気持ちよさそうに眠っている。チャイルドシートに移した瞬間、ちょっとだけ目を開けたものの、母親の気配に安心したのかまたすぐに眠ってしまった。

「相変わらずよく寝る子だな。誠也とは大違いだ」
「誠也だって退院するまでは大人しかったじゃないですか」
豹変するかもしれないと言ってはみたものの、佳乃自身、その可能性は極めて低いと思っていた。
「たぶん誠也とは違う。しかも、全然。不思議だな……どちらも私たちの子どもなのに」
荷物をトランクに入れた俊紀は、性別以上に個性の差がある気がする、と薄く笑いながら運転席に座った。
佳乃が後部座席のチャイルドシートの隣に収まるのを確認し、エンジンをかける。
実はこの『走る札束』は、佳乃が原島邸に来てから三台目である。何度買い換えても同じ車種にするところを見ると、俊紀はよほどこの車が好きなのだろう。佳乃自身も、軽いエンジン音で軽快に走るこの車が大好きだったし、俊紀の運転で迎えに来てもらえたことを心の底では喜んでいた。
本当は誠也も連れてきてほしかったけれど、おそらく彼は保育所に行っているのだろう。
「誠也は元気に保育所に行きましたか？」
「今日は休ませた」

「え？」
「私が仕事を休んでおまえを迎えに来てるのに、あいつだけ保育所ってあんまりじゃないか。あいつは今頃、玄関ホールを行ったり来たりしながら私たちが帰ってくるのを待ってるはずだ」
「それなら一緒に連れてきてくれればよかったのに……」
「それも考えたんだが……」
二人目の子どもが生まれたときの上の子のケアというのは、けっこう大変らしい。
下の子に親を取られるんじゃないかと心配するあまり、赤ちゃん返りをするというのもよく聞く話だ。
誠也は既に三歳半になっているが、だからといって赤ちゃん返りをしないとは限らない。そもそもが母親が大好きでべったりなのだから、妹をライバル視しないようによほど気を配ってやらなければならない――
俊紀は車を運転しながら、そんな説明をした。誠也が生まれたときも、俊紀は育児書を何冊も読みあさって、授乳以外の世話は完璧と思われるぐらいになっていた。二度目の出産にあたって、今度は上の子のケアについて研究し尽くしたのだろう。
俊紀の絵に描いたような『イクメン』ぶりに、佳乃は改めて感心させられた。

「どうしても退院時の主役は赤ん坊と母親だ。おまえがその子を大事そうに抱いて、スタッフからあれこれ声をかけられる姿は見せないほうがいいと思った。家に着いたら、荷物もその子も私に任せろ。おまえはまっすぐに誠也のところに行って、まずはあいつを抱いてやってくれ」

佳乃の留守中、いやその前から、誠也は『僕はもうお兄ちゃんなんだから……』といろいろなことを我慢していた。

お腹が大きくなった佳乃を気遣って、だっこをせがむことも、今までのように甘えてだだをこねることもなくなっていた。

そんな誠也の姿に周囲、とりわけ使用人頭の宮野は不安を募らせた。

かつての俊紀のように、自分の気持ちを抑え込み、無理に成長しようとしているのではないか、と心配したのだ。いくら一卵性父子と言われるほどそっくりでも、そこだけは似てほしくないというのが周囲の率直な意見だった。

「おまえの留守中も、誠也は精一杯いい子でいようと頑張っていた。それはもう、痛々しいほどだった。だから、しばらくは存分に甘えさせてやってくれ」

「わかりました。どうせこの子は寝てばっかりだし、お世話は皆さんに助けてもらって、私は誠也とゆっくりさせていただきます」

「そうしてくれ。今回はステファニーもいるしな」

ステファニー・ブーケは、大澤が原島家の緊急対策班に入る前に海外で知り合った女性で、フランス人の父と日本人の母を持っている。

彼女はボランティア活動中に拉致事件に巻き込まれ、救出に向かった大澤と再会。佳乃の二度目の妊娠が発覚したころに、佳乃の相談役と子どもの世話係をかねて雇い入れられた。

大澤は、知り合った当時から決して相性が良いとは言えなかったこともあり大いに不満らしかったが、俊紀は意に介さず、さっさと日本に呼び寄せ原島邸に住み込ませた。彼女の身体能力の高さと、教師を務める傍ら被災地で子どもの世話をしていた経歴を買ったのである。彼女ならきっと子どもにも好かれるし、しっかり教育してくれるだろう、というのが夫婦の共通意見だった。

佳乃たちの目論見どおり、ステファニーは初めて会った日から誠也を虜にした。

いったん国に戻ってあれこれ準備をしてくると言ったステファニーに、原島邸には何だってあるんだから、このままここにいればいいじゃないか、と口を尖らせたほどだ。

誠也が、赤ん坊に佳乃を取られるかもしれない、という不安な気持ちを抱えながらも、佳乃の身体を気遣って我慢できたのは、ステファニーという存在があったからこそだと

佳乃は感謝していた。

「本当に、ステファニーさんに来ていただいてよかったです。女の子が生まれたら、女性の世話係が必要だと思ったことは確かですが、たとえ二人目も男の子だったとしても、やっぱり女性の手はあったほうがいいですし」

「そうだな。ま、先見の明ありだ」

「さすが、俊紀さんです」

そんな佳乃の言葉に、俊紀はなぜか無言になった。何かまずいことを言っただろうか、ステファニーを雇い入れたのは俊紀さんの考えだったはずなのに……と首を傾げている間に、車は原島邸に到着した。

「お母さーん！　おかえりー！」

車寄せに車が止まるやいなや、誠也が玄関から走り出てきた。たった数日会わなかっただけなのに、やけに大きくなったような気がする。

俊紀に言われたとおり、佳乃は何も持たずに車から降り、勢いよく走ってくる誠也を待ち受けた。だが、そのまま抱きついてくると思った誠也は、佳乃の目前で急停止し、全身を窺うように見た。

「もう平気？　お腹とか、痛くない？」

「大丈夫よ」

「他のどこも？」

誠也の心配そうな顔に頬を緩めながら、佳乃は息子をぎゅっと抱きしめた。新生児とはまったく違うしっかりとした身体に、佳乃は流れた月日を思い返してしまう。

四年前は、泣き叫ぶばかりの赤ん坊だったのに、今では戻ってきた母親の身体まで気遣えるようになっている。誠也の成長に、誇らしさを感じずにいられなかった。

「ただいま、誠也。ちゃんとご飯食べてた？」

「お母さん、そういうときって、『いい子にしてた？』とか言うんじゃないの？」

「だって、誠也はいい子にしてたんでしょ？　そんなの訊くまでもないじゃない」

「うわあ、親ばか」

そう言いながらも、誠也はあからさまに嬉しそうな顔になった。親ばかなんて言葉をもう覚えたのか……と軽くため息をつきながら、佳乃は車から降りてくる俊紀を待った。

「ほら、誠也。おまえの妹だぞ」

俊紀はそう言って、腕の中の赤ん坊を誠也に見せた。

『おまえの妹』という言葉に、彼の巧妙さが表れている。まるで新しいおもちゃを渡す

ような気軽さの中に、兄として新たな家族を温かく迎え入れてほしいという気持ちが潜(ひそ)んでいた。

誠也は精一杯伸び上がり、おくるみに包まれた赤ん坊を覗き込む。

そのとき、それまでひたすら眠りこけていた赤ん坊が、ぱっちりと目を開けた。

「あら……起きたわ」

「兄貴の気配を察して目を覚ますなんて、なかなかやるじゃないか」

「これ……って、見えてるの？」

これと言うな、と言って誠也を軽く窘(たしな)める俊紀に、迎えに出てきていた宮野がうっすらと笑った。

以前、誠也が生まれた直後に、俊紀が『で……これ……？』と看護師に話しかけたことがあった。おそらく宮野は、『これって何ですか』とその場で和子に叱られたことまで含めて、緊急対策班の誰かから聞いたのだろう。その自分を棚に上げて、和子さながらに誠也を叱っているのだから、笑ってしまうのも無理はない。

「たぶんまだ見えてないと思うわ。明るさを感じるぐらいじゃないかしら」

「えーそうなの？　つまんないの。僕のこと、早く覚えてほしいのに」

「心配しなくても大丈夫よ。きっとこの子はお兄ちゃんの声をもう覚えてるわ」

「そうそう、だからこそ目を開けたのかもしれないぞ。お腹の中にいる間、ずっと聞いてた声だからな」

俊紀からもそう言われ、ようやく安心したのか、誠也は、早くおうちに入ろう！　と佳乃を促(うなが)した。

「赤ちゃんが、風邪を引いちゃう。あ、お母さんも！」

「そうね、そうしましょう」

「では、改めまして。おかえりなさいませ、佳乃様」

こほん、と一つ咳払いをしたあと、宮野が深々と頭を下げた。彼の後ろには通いの使用人たちが並んでいる。確か、誠也を産んで戻ったときもこんな調子だった。

佳乃は、そんなに丁寧に迎えてくれなくても、と思ったのだが、原島邸の女主人、しかも出産という大仕事を終えてのご帰還なのだから、これぐらいして当然と宮野は言う。ましてや今回は、原島家に久々に生まれた女の子を抱えての帰還である。大歓迎、というよりも興味津々(きょうみしんしん)というところかもしれない。

「ただいま戻りました。留守中、誠也がお世話になりました」

佳乃は宮野同様、深いお辞儀とともに礼を言った。だがそれに応えたのは、宮野ではなかった。

「心配いらねえ。誠也はお利口だった。父ちゃんのほうがよっぽど……」
「私のことはいい！　というか、どこから湧いたんだ、おまえは！」
「詰め所に決まってるだろ。誰かさんが、警備なんざいらねえーって飛び出していくもんだから、俺様は手持ち無沙汰でモニターを睨んでるしかなかったんだよ。まったく、いくら姫さんと水入らずでいちゃこらしたいからって、SPも連れずにうろちょろしないでくれ」
「黙って大人しく車に乗ってるようなSPなら、ちゃんと連れてった！　まったくおまえらときたら、ろくでもない突っ込みばかり入れやがって！」
――ああ、いつもどおりだ。これぞまさしく原島邸……
俊紀と大澤のやりとりに、佳乃はにっこり笑ってしまう。
俊紀は普段は冷静沈着で、会社ではたとえ部下相手でもぞんざいな口をきくことはない。それが唯一崩れるのが、大澤が率いる緊急対策班を相手にするときなのだ。それはまさしく、幼なじみである大澤に心を許している証拠で、漫才みたいな台詞の応酬を見るたびに、佳乃は俊紀の人間らしさを確認していた。
「また、しばらくお騒がせしますが、よろしくお願いいたします」
そう言いつつ礼をした佳乃に、使用人たちはそれ以上に深く頭を下げる。

そんな使用人たちの列の真ん中を誠也に引っ張られながら通り抜け、佳乃は二階に続く階段を上った。
上がりきったところで、ぱたぱたと走ってきたステファニーに遭遇する。
「ごめんなさい、お迎えに間に合わなくて！」
「いいんですよ、そんなこと」
周到なステファニーにしては珍しい、と思っていると、彼女はいきなり佳乃の目の前に花束を差し出した。どうやら後ろに隠していたらしい。
「出産おめでとう！　これは私のお祝いの気持ちよ」
「わあ、きれいな花束！　ありがとうございます！」
「ステファニー・ブーケのブーケかよ……」
「何か言った？」
ぼそりと呟かれた言葉を聞きつけ、ステファニーが大澤をじろりと睨んだ。大澤は、ふん、とばかりに鼻から息を吐く。
彼女が原島邸に来てから半年以上になるが、このふたりの微妙な対立関係は今もって継続中だ。
お互いに歩み寄りの姿勢など見せもしないし、必要もないと思っているらしい。

時折大澤はステファニーにこんな風に意味もない突っ込みを入れたり、あからさまに邪魔者扱いしたりする。そんなとき、ステファニーは黙ってなどいない。正々堂々と言い返すのだ。

泣く子も黙ると言われる緊急対策班班長相手に壮絶な口げんかを展開し、平然と勤め続けるステファニーは、さすがとしか言いようがなかった。

そんなステファニーの姿勢はさらに大澤をいらだたせ、緊急対策班と俊紀の、格好の観察対象となっている。

それに大澤本人が気づいていないということまであわせて、ステファニーが来てからの大澤はやられっぱなしのように見えた。

「で、なんなんだこの匂い？　なんか化粧品臭い……」

「臭いとか言わないでよ！　お花のいい香りでしょ！」

そう言うとステファニーは、佳乃を寝室に誘った。誠也が生まれてしばらくの間、日中の激務に耐える俊紀の眠りを妨げてはいけないと気を遣った佳乃が、誠也とふたりで使っていた部屋だ。俊紀はそんなことを気にする必要はない、と言ったが、やはり佳乃はこれからしばらくの間、再びそこで過ごすことに決めていた。

寝室に入ったステファニーは浴室に繋がるドアを開けた。中を覗いてみると、そこに

は誠也が生まれてすぐのころに使ったベビーバスが用意されていた。

「お風呂……？」

「赤ちゃんは日中の暖かい時間にお風呂に入れたほうがいいんでしょ？」

「そういえば……誠也は暖かい時期に生まれたからあまり気にしませんでしたけど、今は寒い時期だし、お風呂は昼間のうちに済ませたほうがいいかもしれませんね」

「で、せっかくだから赤ちゃん用のバスミルクも入れてみたの」

「この香りはバスミルクだったんですね」

「カレンドラの花よ。ヨーロッパでは昔からずっと、この花をお肌のケアに使ってきたの。赤ちゃんのお肌って生まれて四年ぐらいは柔らかくてすごく敏感だって聞いたから……」

「わざわざ探してくださったんですか？」

「大丈夫、通販だから大した手間じゃなかったわ。赤ちゃんだって見たこともない場所に連れてこられてびっくりしてるかもしれないし、風呂に入れてあげればほっとしてよく眠るんじゃないかなーって」

なるほど、戻ってくる時間に合わせてお風呂の準備をしていたせいで出迎えに来られなかったのか。みんなと一緒に並ぶのではなく、彼女独自のやり方で新しい家族を迎えようとしてくれるなんていかにもステファニーらしい……と佳乃は大いに頷かされた。

無理やり起こして授乳しなければならないほどよく眠る子ではあっても、移動による疲れや興奮がないとは限らない。

花の香りがするお風呂はきっと彼女を心地よい眠りに導いてくれるだろう。

ステファニーの心遣いに、佳乃はにっこりとした。

誠也を産んだとき、原島財閥のメインバンクである東都銀行頭取の娘、城島塔子は佳乃が大好きなケーキをたくさん届けてくれた。

あのときもとても嬉しかったけれど、お肌に優しいバスミルク入りの風呂というのはそれに匹敵するぐらい素敵だ。世話役として娘のことを真剣に考えてくれた証拠、かつ、これまでの原島邸にない女性ならではの気遣いだった。

「女がいるってこういうことなんだな……」

大澤が小声で吐いた台詞には、かなり悔しそうな色が滲んでいて、そこでもまた佳乃は笑ってしまいそうになる。

そんなことで張り合う必要などさらさらないのに、ステファニーがすることなすこと全て気に入らない、といった感ありの大澤は、まるで子どものようだった。

但し、ステファニーのほうはそんな大澤の感情などどこ吹く風とばかりに、原島邸での暮らしを満喫している。それを大澤はますます面白くないと感じているはずだ。

いずれにしても、大澤とステファニーの間の微妙な不協和音を除けば、第二子を迎えての原島邸での暮らしは、順調なスタートを切れそうだった。

出産予定日がクリスマス当日だったため、娘には『柊子』という名前が用意されていた。この名前は誠也の時と同様、俊紀が考えたものである。

俊紀の両親である孝史と和子は、今時『子』が付く名前は流行らないのでは？　と心配したけれど、佳乃はむしろ、大歓迎だった。

佳乃の母、妙子も、義母である和子も、名前に子が付いている。早々と亡くなってしまった母への想いは語るまでもない。

義母である和子とは俊紀が交通事故に遭ったのを機にいろいろなことがあったけれど、今ではすっかり和解し、原島邸の女主人としても育児の先輩としても佳乃にとってよきアドバイザーになってくれている。

数年前に仕事を始め、そのパートナーと幸せな結婚をしたばかりの城島塔子も『子』が付く名前だ。塔子とは、最初は俊紀を巡るライバルだったのに、俊紀の事故に際して彼のもとを去ろうとした佳乃を援護射撃してくれた。いつかは自分も子どもを……と願う塔子は、自分が母親になったときにはいろいろ教えてほしい……なんて言っているほ

どで、ふたりはかなり打ち解けた関係になっていた。
つまり佳乃の周りにいる『子』の付く女性はみな魅力的で見習いたくなる人ばかり。我が子にもそうなってほしいと願う佳乃にとって、流行廃りなど関係なかった。
「十二月生まれだからクリスマスの柊に因んで柊子。すごく素敵だと思います」
その一言で、娘の名前は柊子に決まり、実際の誕生日が三日ほど早まったことによる変更もなかった。

†

「お母さん、行ってきまーす！」
年末年始の休みが終わり、年明け初出勤となった一月六日、誠也は柊子に授乳を終えたばかりの佳乃に元気な声をかけてきた。
母親である自分が家にいるのだから誠也も保育所を休ませてもいいと思っていた佳乃は、いつもどおりに出かけようとした誠也を見て驚いた。
「おうちにいてもいいのよ？」
そんな佳乃の声かけに、誠也はきっぱり首を振った。

「だってずっとみんなと会ってないし、健ちゃんとも遊びたいんだ。それに、今日はチャンスなんだよ」
「チャンス？」
「おもちゃは使い放題だし、遊戯室だってガラガラ」
社内保育所の園児は、言うまでもなく皆、株式会社原島の社員の子どもたちである。有給休暇の消化を奨励している株式会社原島では、年末年始の休みに有給休暇をつなげて海外に出かける者も多い。従って、仕事始めとなる一月六日に保育所にやってくる園児はいつもよりずっと少ないのだそうだ。
誠也の説明を聞いて佳乃は、おもちゃなんて原島邸にはうんざりするほどあるし、人がいなくてガラガラというのなら原島邸のほうがずっと……と思ってしまった。だが、誠也はそんな佳乃の考えを読んだように言葉を続けた。
「それにさ、公園のブランコや滑り台の順番待ちがずーっと少ないんだよ。今日は絶対行かなきゃ！」
おもちゃはうちにだってあるけど、ブランコや滑り台まではないもんね！　と誠也は言い、俊紀とともに意気揚々と出かけていった。
むしろ、行きたくなさそうだったのは俊紀のほうで、『社長の有給休暇消化率につい

ては誰も言及してくれない』などとぶつぶつ言っていた。
そもそも社長の有給休暇という概念自体がおかしいと佳乃は思う。
それに、彼の場合、下手に休みを取るとあとが大変だとわかっている。
彼の性格から考えても、いくら有給休暇があったところで、仕事から完全に離れて休むことなどできないだろう。平日ならば余計にである。家で仕事を気にしているぐらいなら、さっさと出勤して片付けてしまったほうが彼のためにもいい。
「ほらボス！　誠也が待ってるぞ。さっさと車に乗りやがれ！」
家族が増えたんだからせっせと働いて養わなきゃだめだろうが！　などと大澤に発破をかけられ、俊紀は渋々出かけていった。
俊紀が働かなくても、多大なる資産を抱える原島家の家族は路頭に迷ったりしないが、彼が仕事をしないことで困る社員はたくさんいる。彼らのためにも、職務を全うするべきだと佳乃も思っていた。但し、大澤の場合、明らかに嫌がらせだとわかっていたけれど……
運転手付きの車に乗り込んだ俊紀と誠也、そして大澤を見送り、佳乃はやれやれ……と育児室に戻った。
起きているとは思わなかったけれど、案の定、柊子はすやすやと眠っていた。

「寝る子は育つって言うけど、あんたはちっとも大きくならないわねえ……」
同じころの誠也に比べると、柊子は明らかに授乳量が少ない。けれど彼女の場合、大量摂取大量廃棄だった誠也と違い、滅多にリバースすることはなかった。
だからこそ、ぎりぎりなんとか成長曲線の標準下限に留まっているのだが、生まれたときから小さかっただけに佳乃の心配はやまない。
飲んで寝て、飲んで寝てを繰り返し、大泣きしてカロリーを消費することもないのだから、もうちょっと大きくなってくれてもいいのにとため息しきりだった。
「まーた、ため息ついてる」
そこに入ってきたのはステファニーだった。
彼女は佳乃に対して敬語を使うことはない。使用人よりも相談役、あるいは友人に近い存在がほしかった佳乃が、ステファニーが原島邸に住み込んだ最初の日に、敬語だけは勘弁してほしいと頼んだのだ。
日本人を母に持つステファニーが、日本語に不自由することはない。けれど、さすがに敬語まで流暢とはいかないこともあり、彼女は佳乃の申し出をふたつ返事で受け入れてくれた。
だが、一方、佳乃は原島邸の誰に対してでも、よほどのことがない限り丁寧語を使う。

おかげで宮野や料理長の山本は『どちらが主人かわからない』とため息を漏らしている。
そんなのどうだっていいじゃないですか、という佳乃の意見に諸手を挙げて賛成するのは大澤ひとりだった。彼は自分自身が俊紀に対してぞんざいな口をきく手前、ステファニーの言葉遣いを肯定するしかないのだろう。
「そうですねえ……ため息ばっかりついてると、幸せが逃げちゃうって言いますしね」
「多少逃げたって平気なぐらい、ここには幸せが溢れてるけどね。少しぐらい分けていただきたいものだわ」
「……なにか、ご不満な点でも？」
原島邸で働いてくれないか、と持ちかけたのは佳乃だ。祖国を離れて、見知らぬ人々に囲まれて暮らしているステファニーが不満に感じることがあるとしたら、それは是非とも改善しなければ……と佳乃は真剣な眼差しになった。
ところがステファニーは、そんな佳乃を見て大げさに首を振った。
「ごめんなさい。なんて言ったかしら、確か……言葉のアヤ？　不満なんてぜんぜんないの。むしろ待遇がよすぎて申し訳ないと思ってるぐらいよ。まあ、若干一名目障りな男がいるけど、それは最初からわかってたことだし、これでもスルー力はあるから平気」
それはどうだろう……と佳乃は横目でステファニーを窺ってしまう。

彼女は自分で言うほど『目障りな男』をスルーできていない。むしろ寄ると触ると小競り合い勃発だった。
もっともそれは、大澤があまりにもステファニーを目の敵にしすぎて、何かにつけてぶつぶつと文句を言うからにすぎない。しかも大澤の地声はけっこう大きいから当然ステファニーの耳に入る。彼女が言う『スルー力はある』が本当なら言い返したりしないだろうに、毎度毎度口げんかが起こるところを見ると、ステファニーのスルー力は自分で考えているほどではない。
いずれにしても大澤には、もう少し言葉を控えるよう伝えたほうがいいかもしれない。彼が余計なことを口にしない限り、言い合いにはならないのだから……
佳乃がそんなことを思っている間に、ステファニーは部屋の窓を開け空気を入れ換えている。新生児にそんなに冷たい空気を当てて大丈夫だろうか、と一瞬不安になるが、ステファニーは平然としている。
「エアコン三昧でよどんだ空気の中に置いておくのはよくないわ。たまには換気しないと」
「でも……」
原島邸は空調設備完備で、一日中強制換気されている。だから本来は空気の入れ換え

など必要ないのだ。だがそんな説明は、ステファニーには通用しなかった。
「機械を通して入ってくる空気と、窓から自然に入ってくる空気じゃ、全然違うでしょ？　現にこの部屋、暖まりすぎてちょっと息苦しいぐらいじゃない。ホリーの顔だって赤くなってるわ。きっと暑いのよ」
　ねえ、ホリー？　とステファニーは柊子に話しかける。ちなみに『ホリー』というのはステファニーがつけた柊子のあだ名で、柊を英語に訳したものである。
　最初ステファニーは母国語であるフランス語にしようと思ったらしいが、フランス語で柊は『Houx』。フランス語の場合、最初のHは発音しないため『ウー』となる。それでは某特撮ヒーローものに出てくる怪獣みたいだ、と大澤に突っ込みを入れられ、やむなく英語に変更したという経緯がある。
　その特撮ヒーローを知らなかったステファニーは、どこが悪いのよ！　と憤慨(ふんがい)していたが、それを聞いた人間の微妙な顔色を読んだのだろう。佳乃にしても、愛娘と怪獣の名前が同じというのはあまり喜ばしくない。この件に限っては、大澤の指摘に感謝だった。
「それは認めます。でも……あら、起きてたの？」
　佳乃の声に反応したのか、はたまたステファニーとのやりとりが耳障りだったのか、とにかく柊子は目をぱっちり開けてふたりのほうを見ていた。

「こんなに大人しく目を覚ます赤ちゃんがいるなんて、びっくりです」
「ほんとよね。普通なら起きたらひと泣きぐらいしそうなものだけど」
「なにからなにまで誠也と正反対で、二人目って気がしません」
　経験がある分、二人目の育児は楽だと言われる。それがまったくの間違いだとまでは言い切れないが、楽なばかりではない。
　誠也と柊子では性別も違うし、性格も真逆に近い。誠也のときはこうだった、というのがほとんど通用しないのだ。佳乃が初めての育児のように感じても無理はない。
　ぼやく佳乃に、ステファニーはクスクス笑いながら頷いた。
「でも考えようによっては、先に生まれたのが誠也でよかったんじゃない？　逆だったらさぞかし大変だったでしょう」
「日本には一姫二太郎って言葉があるんですよ。初めは育てやすい女の子を授かったほうがいいって考え方らしいです。でも、私は大人しい女の子のあとで男の子を育てるのは大変だっていう意見に賛成です。こんなことを言っちゃなんですけど、誠也に比べると柊子は本当に扱いが楽で……」
「あらでも、誠也はとてもいい子よ。やんちゃだけど、話して聞かせればちゃんと理解するし、彼なりに限度をわきまえてるように見えるわ」

「それはそれで心配じゃありません？　小さい大人みたいで、これで大丈夫かなって……」

かつて俊紀がそうだった。天真爛漫な子どもを卒業したあと、彼は一足飛びに大人になり、原島財閥総裁への道を歩み始めた。周囲の期待に応えなければと思うあまり、重圧に押しつぶされそうになり、人間としての温かみを忘れそうになっていた。

誠也に同じ道は辿らせたくない。宮野はしきりにそれを心配しているし、佳乃も同じ思いである。

原島家第一子長男――いつかは財閥の長という地位に就かねばならないとしても、もうしばらくの間は、天真爛漫な子どもでいてほしい。たとえそれに振り回されることになっても、アンドロイドみたいな我が子を見るよりはずっといい……それが佳乃の嘘偽らざる気持ちだった。

ステファニーは息子を心配する佳乃に、とても柔らかい眼差しを向ける。そして、きっぱりと言い切った。

「大丈夫。誠也は『仕事用アンドロイド』になんてならないわ」

「どうしてですか？」

「だってね、彼は信じ合い、愛し合う人たちを目の前にしてるのよ。毎日毎日、それこそ一年三百六十五日、両親の間で飛び交う愛を見せつけられてる。こんなにわかりやすい愛情表現、愛の国と名高きフランス人だって赤面するってぐらいの奴をね。そんな彼が、どうしてアンドロイドみたいになれるって言うの？　あなたたちふたりが今までどおりに過ごすなら、誠也はその間ですくすくとまっとう、かつ愛を疑わず、穏やかに成長するに決まってるじゃない」

あ、ごめんなさい、穏やかかどうかは責任持てないわ、とあっさり訂正を入れたあと、ステファニーはにっこりと笑った。

フランス人ってすごいな……日常的に『愛』なんて言葉を使えるんだ……

佳乃はまるで見当違いな感想を抱きつつも、ステファニーの言葉に安堵する。

確かに、孝史と和子だってお互いを深く想い合っているし、俊紀という息子をできる限り慈しんだに違いない。けれど、その表現方法は至って日本人的で、俊紀のように開けっぴろげなものではなかったのだろう。

そこにあるには違いないが、つかみ取れない――それが、彼らの愛情の示し方だった。子どもだった俊紀にはそれが理解しづらかったのかもしれない。

だが俊紀は違う。

彼の愛情表現は、太いマジックペンで引いた実線のようにわかりやすい。佳乃は言う

までもなく、誠也に対しても同じだ。そこにあるとはっきりわかる愛情の中にいれば、感情を失うことなどないというステファニーの理屈は間違っていない。

「ご心配なく、誠也は大丈夫。大丈夫になるように私も頑張るし」

「よろしくお願いします」

「誠也もホリーもまとめて面倒見るわ、任せといて！」

そしてステファニーは慣れた仕草で柊子のおむつを替え、ちょっとお母さんにだっこしてもらいなさい、とおくるみごと佳乃に渡してきた。

身体の世話は誰でもできる、でもどんな温かい腕をもってしても、母親の代わりになるのは難しい、とステファニーは言う。だから、赤ちゃんは存分に抱いてやらなければ……と。

乳児特有の甘酸っぱい匂いを胸一杯に吸い込みながら、頼もしい助っ人を得られたことに佳乃は心の底から感謝していた。

†

その日、原島邸には柊子のお食い初めを祝うために孝史夫妻や佳乃の祖母である静代、

そして朋香やスタイリストの門前まで集まってきていた。

お食い初めは百日祝いとも言われ、本来なら文字どおり、生まれてから百日目を節目として祝うものであるが、俊紀の多忙により延期され、四ヶ月終了間近というこの日になってしまった。

俊紀があまりにも忙しそうなので、いっそ自分たちだけでやってしまおうかと思わないでもなかったが、俊紀は断固として自分も参加すると言い張り、やむなく日延べしての開催となったのである。

大澤などは、そんなものどうでもいいじゃないか、たかが赤ん坊が生まれて百日ってだけでなんて騒ぎだ、と渋い顔をした。だが、大澤以外の緊急対策班の面々は、日に日に表情豊かになっていく主の娘に骨抜き状態だった。

「やっぱり女の子って可愛いですねえ……。特にそんな服を着てると、テレビコマーシャルにでも出られそうな感じだ」

とは小川の弁。彼は原島邸内のあちこちに設置されているモニター用のカメラに異常がないか点検に来たところだった。

お食い初めとそのために集まってくれる人たちに備えて、レースたっぷりの真っ白なベビー服に着替えさせられた柊子は、ベビー用品のコマーシャルに出てくる赤ちゃんタ

レントのように愛らしい。そう思うのは自分が親ばかだからかと佳乃は思っていたのだが、小川の目にも同じように映るらしい。

ところが、次に口を開いた井上の言葉は酷かった。

「ほんと、こう言っちゃあなんだけど、同じ頃の誠也の目つきの悪さとは段違い……」

「ひどい！」

確かに、生まれたときから誠也の面構えのたくましさは筆舌に尽くしがたかったけれど、そこまで言われる筋合いはない、と佳乃は抗議した。

「誠也の目つきの悪さは遺伝子のなせる業です！　本人に責任のないことでそういう風に言うのはやめてください！」

「そりゃそうだ。誠也のせいにするのは気の毒ってもんだよ」

「でも小川さん。ちび姫だって同じ遺伝子が入ってるじゃないですか。それなのに眉間に皺の欠片もないし、近寄っただけで睨み付けることもないし」

「まあなあ……でも誠也のそれは、学習って奴じゃないのか？　原島家当主たるものそうあるべき、とか？　なんせ目の前にご立派な見本がうろうろしてるし」

「見本ってボスのことでしょう？　じゃあやっぱりボスのせいじゃないですか」

「そうか……どうしたって悪いのはボスってことになるのか……」

「誰が悪いって？」

「うわあボス！　聞いてたんですか⁉」

そこに現れたのは俊紀だった。

ついさっきまで応接室で先代夫妻と話していたはずなのに……と井上が焦りまくる。

井上を一睨みで黙らせたあと、俊紀は佳乃の腕の中の柊子に話しかけた。

「今日はたくさん飲めたか？」

赤ん坊に授乳の状況を訊いたところで答えられるわけがない。それでも俊紀は、柊子の薄桃色の頬を人差し指でそっと撫でて目尻を下げている。さっき井上を睨み付けた表情との落差に、周囲は唖然としているが、佳乃はもう慣れっこである。

授乳量は相変わらず、いつもどおり燃費抜群です……と、柊子に代わって答えようとしたとき、ガッシャーン！　という大きな音が聞こえてきた。

「なんだ、今の⁉」

それまで呑気そうにしていた緊急対策班員たちは一気に表情を引き締め、一斉に玄関に向けて駆け出そうとした。

その彼らが育児室のドアを開けるか開けないかのうちに、スピーカーから大澤の声が降ってくる。

原島邸では方々にスピーカーやモニターカメラが設置され、敷地内に異状がないか監視するとともに、緊急時の連絡にも使われているのだ。

「正門に車が突っ込んできた！　フロントが潰れてる！　ドアをこじ開けて運転手を引っ張り出すから、すぐに来てくれ！　ついでに誰か警察と消防に連絡を入れろ！」

「ラジャー！」

通報は宮野に任せ、小川と井上は階段を駆け下りていく。

俊紀も彼らに続いたが、柊子を抱いたままの佳乃はさすがについていくわけにいかない。やむを得ず、窓から外を覗いてみた。

ところが植栽に阻まれて正門はさっぱり見えない。もしも見えたとしても、閉ざされている門の向こう側で起こっていることなど知りようもなかった。こうなると頼りになるのはスピーカーからの声だけだ。

そうこうしている間にも小川たちは正門に到着したらしく、スピーカーを通じて彼らのやりとりが聞こえてきた。

「うわあ……ぺっちゃんこ……」

「ほんとに、見事に潰れてるな……。まあ、うちの門は頑丈だから、車が突っ込んできてもたいていの場合は潰れるのは車のほうだけど」

「戦車にでも乗ってこない限り、うちの門は潰せねえよ」

原島邸の門は、おとぎ話に出てくるヨーロッパ貴族の屋敷のように大がかりなものである。幅も高さも存分にあるし、なにより頑丈だ。ちょっとやそっとで壊れるわけがなかった。

とはいえ、あんなに大きな音がするぐらい勢いよくぶつかったのならば、燃料漏れを起こしているかもしれない。火災が発生する可能性もあるから、車の中に運転手が取り残されている状態は危険すぎる。早急に車から離れさせるべきだろう。

佳乃はやきもきしながらスピーカーからの声に耳を傾けていた。

「まったくなんでここまでひしゃげるかな」

「日本の車って弱すぎるよなあ。特にこんな軽自動車じゃ……」

「あーこれ、完全に両足ともイッちゃってるな」

「でも、どうやら燃料漏れはしてないみたいだぞ」

「そりゃラッキー。そういうところはしっかり作ってあるんだな」

そんな言葉を交わしながら、緊急対策班員たちの作業は続く。

しばらくして、よっしゃ！　という大澤の声が聞こえた。どうやら運転手の救出に成功したらしい。

ところが、聞き耳を立てていた佳乃がほっとしたのもつかの間、再び大澤が素っ頓狂な声を上げた。

「おまえ、いったい何やってんだ!!」

「何でこんなところに!!」

俊紀の声もする。彼にしては珍しく慌てた様子に、さらに不安が煽られる。

「もう一台救急車を依頼しろ！　大至急だ！」

「まったく、なんて面倒なんだ！」

「大澤、いくらなんでも口を慎め！」

――なに？　なにが起こったの？　他に誰か怪我でもしたの!?

彼らのやりとりは付けっぱなしにしているインカムを通してスピーカーから聞こえ続けている。とはいえ、インカムが拾い上げるのは音声だけ。いくら背伸びして見ても原島邸の正門で何が起こっているかはわからなかった。

しびれを切らした佳乃は、柊子を預けようとステファニーを探した。ところがステファニーはどこにもいない。いつもならたいてい佳乃や子どもたちのそばにいるのに……

そこに息を切らして駆け込んできたのは誠也だった。

「お母さん！　大変！　ステファニーが怪我しちゃった！」

「なんですってーー!!」

佳乃は何事かとやってきた和子に柊子を託し、誠也に続いて階段を下りた。気持ちは焦っていたけれど、足はちっとも進まない。屋敷と正門の距離が今日ほど忌わしかったことはなかった。

やっとのことで辿り着いてみると、ステファニーは救急隊員と緊急対策班員たちに囲まれていた。ひしゃげた車から引っ張り出された運転手は、すでに救急車の中に収容されたらしい。

「えーっと……」

救急隊員たちはステファニーを一目見て、顔を見合わせている。ステファニーの外国人そのものの容姿を見て、戸惑っているに違いない。

「大丈夫だ。こいつ、見てくれはこんなだが日本語はぺらぺらだ」

ぶすっとした口調で大澤に言われ、救急隊員たちはようやく安堵の表情を見せた。

「それでは、ちょっと失礼します」

慣れた仕草で脈や血圧を測り、救急隊員はステファニーに次々と質問をする。

どの質問にもしっかり答えているので意識に問題はない。庇うような仕草から、負傷したのは右腕だとわかった。

「それでは今から受け入れ病院を探して……」
「うちのかかりつけに運んでくれ」
後ろから俊紀の声がした。彼は先ほどから少し離れたところで電話をかけていた。仕事の連絡かと思っていたが、どうやら病院に連絡を取っていたらしい。
「今、電話で確認を取ったから受け入れに問題はないはずだ」
「わかりました。助かります」
救急車の受け入れ先を見つけるのは難しい。特に日曜日は休みの病院が多く、どうかすると受け入れ先を探すのに一時間近くかかる場合もあるらしい。ましてや怪我人はふたり。一軒一軒電話をかけて探す手間が省かれたのは、彼らにしてみればありがたいに違いない。
「運転手はやむを得ないとして、こちらの女性はこの家の方ですよね？　できればどなたか付き添いをお願いしたいのですが……」
「私が行きます」
佳乃は自ら名乗りを上げ、救急車に乗り込もうとした。
ステファニーの家族は皆、フランスにいる。雇い主である自分が付き添うべきだ。
ところが、佳乃の申し出は大澤にあっけなく止められた。

「あんたら今からちび姫の百日祝いをするんだろ？　姫さんがいなけりゃ話にならん」
「そんなの……」
「佳乃さん、私はひとりで大丈夫よ。大人しく病院に行って手当てしてもらってくるから、あなたはホリーのお祝いをしてあげて」
「ひとりというわけにはいかないだろう。見たところ、怪我をしたのは右手のようだし、書類ひとつ書けないはずだ」
俊紀はそう言うと、周りをぐるりと見回した。来客予定があったため、非番の班員は少なく、ほとんどのメンバーがこの場に揃っている。メンバーを確認し、俊紀は非常に意地悪そうな笑みを浮かべた。
「これだけ揃っているなら警備は大丈夫だな。よし、大澤、付き添いにはおまえが行け」
「なんで俺なんだよ！　んなもん、誰だっていいじゃねえか！」
「おまえはステファニーとは付き合いが長いし、彼女の父上とも懇意なんだろう？　あとで報告もしなきゃならない。おまえが行ったほうがなにかと手っ取り早い」
「いやよ、ノブなんかに来てもらっても煩いだけだもの！」
「まあそう言わずに。帰りの足だって困るし、大澤には車で追いかけさせるから治療が済んだらそれに乗って帰ってくればいい」

今日は人の出入りも多いし、原島邸の運転手も大忙しだ。迎えにいけるかどうかわからない、とまで言われてステファニーは渋々諦めた。

「じゃあ、大澤、頼んだぞ」

「なんてこったい！」

大澤は相変わらずぶつぶつ文句を言いながらも、ガレージに向かう。やがて、当てつけるようにエンジンを吹かし、大澤の車は救急車の後ろを追っていった。

「あーあ……あれ、途中で救急車を追い抜くんじゃね？」

「ありえねえよ」

「にしても……ステファニーさん、なんでこんなとこにいたのかな」

小川が不思議そうにあたりを見回した。佳乃の相談役兼子供の世話係であるステファニーが、正門近辺で何をしていたのだろう、と首を傾げている。それは佳乃も同じ思いだった。

その疑問に答えたのは誠也だった。

「飛行機を取りに行ってくれたんだ」

「飛行機？」

「うん、紙飛行機。庭で飛ばしてたんだけど、飛びすぎて外に出ちゃったんだよ。ステ

立ち読みサンプルはここまで

ファニーはそれを取りに行ってくれたんだ……」

紙飛行機ぐらいまた作ればいいから、と言ったところ、そんなことじゃだめだと叱られた。たとえ紙飛行機といえども、せっかく作ったのだから大事にすべきだし、外に出たまま放置したらゴミになってしまう。どうせ落ちているのは道だろうから、ちょっと行って取ってくる……と、ステファニーは通用口から出ていったらしい。

「紙飛行機はすぐ見つかったらしいんだけど、戻ろうとしたところにこの車が……」

誠也は無残にひしゃげた車を見て言った。

警察及び緊急対策班員たちのチェックにより、燃料漏れはないことがわかった。火災を誘発する可能性はないし、このままでは邪魔になるということで、事故を起こした車は今、原島邸の敷地内に入れられている。

誠也の説明に、小川はしきりに頷いた。

「たぶん門の暗証番号を入れてたんだな。うつむいて数字を打ち込んでるところに後ろから突っ込まれたんだろう。でも、それにしては怪我をしたのが右腕って変だな……」

「ていうかさあ……何なんだよ、これ」

井上が呆れたように車のボンネットを指さした。

左角から突っ込んだらしくボンネットの左半分は無残な状況だったが、右側の一部は